

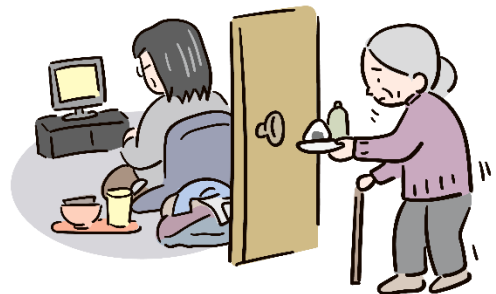
SOSニュース

「8050 問題」～中高年のひきこもりについて

●まずは身近な体験から

「8050 問題」という言葉を耳にする度に、私にとって身近な2名のことが思い出されます。本人の名誉もあるので片方をT君、もう一名をK君としますが、T君は私のいとこであり、K君は大学の同期生です。私の知る範囲では、T君は大学卒業後最初に入った企業で環境になじめず、3年程勤務した後に自宅に戻って来たが、その後は家族以外の人と会うことに恐怖を感じてしまうようで、自宅に引きこもったまま昼夜逆転の生活をおよそ20年も続けているとのこと。またK君も大学卒業後何度か職を変えたあと、30代後半で務めた事務所が肌に合わなかったらしく、やはりその後は家族以外の人との接触に恐怖心を持ってしまうようでほとんど家から出ない生活をしているそうです。ただK君は比較的軽め？の症状のようで本人も何とか社会復帰したい気持ちはあるそうなのですが、10年近くもこもりきりの生活をしてしまったため社会復帰は容易でないとのこと。

問題はT君もK君も肉体的には問題ないものの、精神的な問題で働けないまま10年以上生きてこられたのは両親の支援（両親の年金）と雨風がしのげる家があったからであり、自身が年を取ればその分親も年を取ってしまうという事実です。当然ながら親が死亡すれば本人の生計費も同時に失われるため、否が応でも10年もすれば解決してしまうこととなりますが、これがとても悲劇的な「解決」であることは言うまでもありません。



●「8050 問題」解決のために

ここで改めて「8050 問題」についてですが、これは80代の親と50代の子どもが同居し、子どもが「ひきこもり」であるため高齢の親の年金や資産に依存していることで生じる社会問題のことです。驚くべきはその数で、内閣府の調査（2019年）によると40～64歳の中高年のひきこもりは全国に約61万人存在するとのことで15～39歳の若年層のひきこもり（54万人）より多いというのが現状です。これは元々若者だったひきこもりが社会全体の高齢化に伴ってそのまま高齢化した結果とみられていますが、今後ますます高齢化が進むことを考えれば「9060 問題」へと事態が深刻化することも懸念され、いまのうちに社会全体で対策を講じていくことが急務となっています。

こうしたことから現在、行政による包括的な支援や各自治体ベースでの見守りサービス、医療や就労支援との連携等、様々な対応策が実施されています。一例として、厚生労働省のHPより「ひきこもり地域支援センター」についての概要図を下に掲載します。

<参考> ひきこもり地域支援センター等設置運営事業（平成21年度～）



出典：厚生労働省 HP「ひきこもり支援推進事業」より

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/hikikomori/index.html

社会保険労務士としての立場でこの問題を考えた場合、ひとつの策として障害年金の申請が考えられます。ただしひきこもりの事実証明だけでの年金請求は現時点では厳しく、ほかになんらかの条件（脳に障害がある等）が必要になることも多いため、障害年金の申請を検討される場合には社会保険労務士等の専門家への相談をお勧めします。

さらに一般論として「ひきこもり」の原因はストレスや環境変化、精神的疾患、発達特性等が複合的に関与した結果として生じるケースが多いため、専門の心理カウンセラーによるカウンセリングも有効な手段になります。お悩みの際はこうしたさまざまな専門家がワンストップで対応する SOS 総合相談グループに是非ご相談ください。

2026年4月
 社会保険・労務部会
 設楽 昌明（社会保険労務士）

「ひとりで悩む前に」お気軽にご相談ください。